

1. 教育の責任

専門は地域の経済と産業政策。政策学とは課題解決志向の学問である。世界中のどこであってもまたどんな時代であっても、人が社会を形成し共に生きていく上で、解決されるべき様々な課題がある。そうした「課題の乗り越え方」に焦点を当てる。授業では、地域の産業構造を学んだり、地域の課題解決に向けた公共的な政策を立案・実施するための実践的な知識の修得を担当している。ゼミではその集大成として、実際に街にでて社会課題の発見や地域と共に発展しようとする企業活動の事例などを調査する。

これらの知識は、とくに公務の仕事で有用であり、公務員輩出を担う学内チームの一員としても責任を持つ。

2. 教育の理念

この10年～10数年のうちに私たちは、気候変動をはじめ地球規模での今後の変化の方向性が決まる「ティッピングポイント」を迎えているといわれる。そうした大きな岐路に立ち、これから長い人生を生きる若い世代こそが、問題の当事者として様々な選択をしていく権利と責任を持つべきだろう。何かを選択するということは、価値の判断に関わり、また同時に主体性の問題に関わる。そのように考えると、こんにちの学生にとってこれからの時代を生き抜くための知恵とは、すでに出来上がった社会システムを上手く渡るための取り扱い説明的なものだけでなく、その社会システムが根差している「価値観」へ思いを巡らせ、自身の感性でそれを問い直す知恵だと考えている。かつてスピノザは「コナトゥス」という概念でモノの（そして人の）本質を形質的なものではなく、性向・ある状態であろうとする力として表した。その上で人の幸福を、性向と周囲との組み合わせの問題として議論した。

私たちは学生の幸福を増進するために教育を提供する。それは特定の形質に近づけることを目的にするのではなく、学生一人ひとりが自分にとってより良い組み合わせに巡り合うための支援であるべきだというのが、私の教育の理念である。自身の性向＝価値観に気づき、それを把握したり鍛えたり表現したりするための知識を整え、そして他者と交わるための少しばかりの自信と勇気を後押ししたいと考えている。

3. 教育の方法

【心かけ】

知識や技術の伝達に際しては、卒業後に振り返って思い返すことができるような「手がかり」のようなものが学生の手もとに残ることを目指す。それは学修した時の知識情報を常にアップデートできるようにするためである。

学生との接し方は、一人の人間としてリスペクトを持つことを大事にする。

自らの専門分野における成長に向けては、学際領域であることに鑑みて多様な参加者の集う研究会に出て、異分野の議論に自らを晒すことを課す。

そして何より、学生と教員が直に社会と関わりを持ちながら鍛えていきたい。そのためには「社会とつながった学びの場」の確保が必要であり、地域社会との連携関係マネジメントに注力する。

【学生に求めること】

学生本人が自分自身に期待し、成長した自分の姿をできるだけ具体的に想像してくれることを期待する。

はじめて会った人とも自然に話せるように、自分自身の知識や能力に自信をもってもらいたい。

【教育実践】

講義のスタイル・方法の特徴は、学生自身が自分で考え、そのアイデアを他者と交換する時間を確保することである。

教科書や参考図書は多くを指定しないが、読書量（幅）を増すことを勧める。

正解を言い当てる型の試験は多用せず、文章トレーニングの意味も込めてレポートによる理解内容の表現を通じて評価する。

その他事項として、クラス内、学内に閉じず可能な限り他学や社会人からの刺激を学生個々が受けられるように工夫を施す。

4. 教育の成果

【学生】 上記のような教育を実践してきた結果、たとえば24年度のゼミ生募集に際しては定員15に対して倍以上（37）の面

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：経営学部 名前：坂倉 孝雄 作成日：2023年12月20日

談申し込みを受けるに至り、3～4年次の指導教員の候補に値するとの評価を受けた。

【同僚】 また授業見学の同僚からは、小グループワークの活用などにより重点事項の印象を深める教育手法が参考になるとのコメントがあった他、見学を契機に全回通して聴講して下さる先生もあった。

【対外】 私のゼミでは関西地盤の民間企業や兵庫県庁とのプロジェクトも実施しているが、包括連携の申し出を頂いたり、単年度事業である県庁のプロジェクトにも継続的に声をかけてもらえるなど、教育活動とその成果の実践について一定の評価を頂くことができる。

5. 改善への努力と今後の目標

担当する部門の課題としては、まずは公務員さらには地域のための職につく学生の輩出に向けた科目ラインナップの充実に貢献することがある。限られたコマ数、時間数の中で、他の先生と強調しながらいかに有意義な教育内容とするかは、毎年見直し積み重ねていくべき改善ポイントである。

さらに、大学全体の取組とリンクして、クロスオーバーの魅力を打ち出していくことも今後の目標である。メジャー内での相互乗り入れ・相乗効果はもちろん、学部内さらに学部横断の科目や学習機会の設定などに向けて取り組んでいきたい。

現在の学生の性質として、関心が持てないと取り組めないというハードルが比較的多くの学生に共通してある。学びを主体的なものにするためにも既存の仕組みを活用しながら、新たな動機付けにつながるような仕掛けを導入する必要がある。高校ですでに進められている総合学習や探求型学習の発展を実現できるような教育内容の充実に取り組んでいきたい。

【添付資料】

・ゼミで学生たちが調査し、表現した地域情報紙

「OTEMAE TOURISM TIMES」1&2

・その活動を企業が取り上げたペーパー

「H2O PRESS」vol. 01

・地域関連の教員同士で企画した出版物

「1923～関東大震災と阪神間～」(2023年、共著、神戸新聞総合印刷)